編集後記：私は,「天気」の編集委員の一人として,1990年半ば以来約5年の間,編集に携わってきております.以前から「天気」は毎月楽しみにしておりましたが,編集委員となってからは,自分が担当した原稿やら編集委員会で話題に上った原稿やらが掲載されますので,なおいっそう親しいものとなりました.私と同じような種類の人達,すなわち,研究畑の人達と学会等で会いますと,「天気」の記事が話題になることが多く,そのような人達には興味深く読まれているという感触を得ています.

昨今,地球環境問題が世の話題となる中で,同問題のうち,現象把握・解明,影響評価,対策の3者の中の現象把握・解明という点で,気象学の占める位置は重要であり,様々な分野の方達から気象学は注目を集めています.気象学会の機関誌である「天気」も注目を集めつつあります.私は今,環境庁の国立環境研究所に勤めておりまして,地球環境問題,特に,地球温暖化問題について,上記3者のそれぞれの立場,あるいは,上記3者を総合化しようとしている立場の研究者の人達に加えて,行政官僚の人達と時折議論しますが,そんな折,時々「天気」の記事を話題に出すことがあります.今年1月号の松野太郎理事長の巻頭言「最も実用的な研究は最も基礎的な研究？」とか,住明正氏や安成哲三氏等による研究プロジェクト関連の一連の記事とか.そうした記事をそれぞれの人達が興味を持って読んでくれます.そういう折,「天気」の存在意義の一側面を再確認している次第です.

一方,編集委員会では,時々「天気」が難しく読みづらい,という声があるということが話題になり,そんな折,私とは異なった形で気象学会員になっている方々には,受け入れられていない部分が大きいことを気づかされます.

これまでの会員の方達,上記のような地球環境問題という流れの中で新しく会員になられる方達あるいは図書室等で目を通す方達に読んでいただけるような普遍的な記事となるよう,編集委員一同努力しております.私が担当する「本だな」,「海外だより」,「研究会報告」,「気象学への手引き」,等においても,少なくとも読んで意味がとおるような達意の記事となるよう,編集者としてささやかながら努力しております.それでも至らぬ点があると思われます.そのような場合は,編集委員に伝えていただいたり,投書いただいたり,コメントをいただけるとありがたいと思います.

(神沢　博)